

倉敷の町屋の風情～豪商の住まいにみる意匠と機能～

Ohashi_House

大橋家住宅

倉敷市阿知

なまこ壁の土蔵、白漆喰が塗られた主屋、長短の縦子が表情豊かな倉敷格子…。倉敷には、こうした特長を持つ伝統的な町屋が残っており、1968（昭和43）年の伝統美観保存条例制定を手始めに、早い時期から美しいまちづくりが進められてきました。大橋家は豪商として栄えた旧家で、江戸期の寛政年間に建てられました。国の重要文化財でもある建物はデザイン性と機能性を兼ね備え、倉敷らしい風情を感じさせます。



◆ 入母屋造、本瓦葺の主屋。2階外壁などに白漆喰を塗ってあることから塗屋造とも呼ばれる。1階中央は土間につながる表口。小作人や塩業者が出入りした



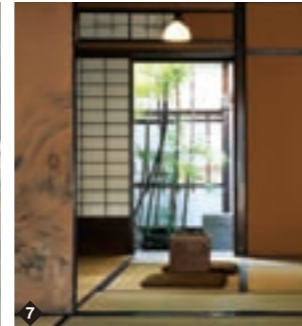
3 四角い目地と丸い釘隠しの漆喰がモダンな柄を描く「なまこ壁」。なまこのような形に漆喰を盛り上げてある
4 長1短3の縦子がデザイン性を感じさせる倉敷格子。下部は目隠しになるように、上部は光が入るように組んである。2階に見えるのが倉敷窓



5 時に300もの米俵が積み上げられたという土間。「店の間」は天井を低くし、賊が刀を振り上げられないように工夫した。屋根裏の厨子にはふすまや屏風、食器などを収納した



6 町屋には玄関を作らないのが当時のしきたりであったため、坪庭には美しさだけでなく、明かり取り、通気といった役割がある



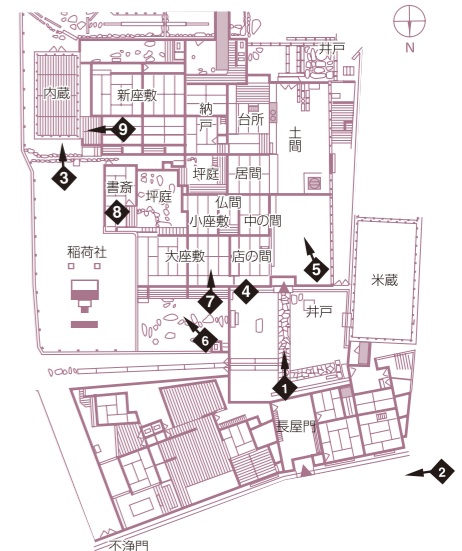
7 来客用大座敷の奥に位置する主の書斎。窓を開くと、かつてはぼたん園が眺められた



8 金品を納めた内蔵。防犯と利便性を考えて居室と接続したと思われる



9 現在の大橋家は、1995（平成7）年完了の保存修理工事によって、最も屋敷構えが整っていたとされる1851（嘉永4）年の姿に復元されています。



現在の大橋家は、1995（平成7）年完了の保存修理工事によって、最も屋敷構えが整っていたとされる1851（嘉永4）年の姿に復元されています。

◆ 街道に面して建つ長屋門。長屋のなかほどを貫くように門を設けてあることが名前の由来。長屋には使用人の居室があった

大

橋家の先祖は豊臣家の家臣であったとい、江戸初期に京から備中へ移り住みました。その後、新田や塩田を開発して「新緑」と呼ばれる新興大地主となり、金融業も営んで財を成しました。天保の飢饉の際、金千両を献上したことで名字を許され、後に帯刀も認められます。1861（文久元）年には庄屋を務めるに至り、繁栄を極めました。

建物は1796〜99（寛政8〜11）年の建造であると「普請寛」などが伝えています。商家でありながら街道沿いに長屋門を設け、前庭を挟んでさらに奥まった場所に主屋を配置しているのは、大橋家の格式

の高さをうかがわせる特長の一つです。主屋2階の外壁や軒裏は蔵を思わせる白漆喰仕上げで、木部が覆われています。このような建築様式を塗屋造とい、火災の類焼を防ぐのが目的。白い外壁には規則正しく倉敷窓が並び、また、1階表口は左右には倉敷格子もしつらえてあり、倉敷の典型的な商家のたたずまいが整っています。

倉敷窓は内部の厨子（物置）の採光用であり、5本の格子と、その内側に引戸がある小窓の名称です。主屋の屋根裏には厨子だけでなく和室もあり、「厨子二階」という重層構造になっています。表口を入ると、主屋の西側を貫いて、通

り庭とも呼ばれる広い土間が裏口まで続いています。秋には街道から直接、土間へ荷車が小作米を運び込みました。そのため、長屋門や主屋の蹴放しの敷居は取り外せる仕組みになっています。検品を受けた米は隣接する米蔵に納められ、やがて、屋敷裏にあったとされる船着場から京 大阪へ年貢米として送り出されました。

こうした荷物や普段の来客は土間へ通されましたが、武士などは前庭から左へ進み、庭から座敷へ上がりました。広い座敷は派手さこそ無いものの品格を感じさせる数寄屋造で、坪庭から光や風が入る快適な居住空間です。

【厨子】格子や障子戸で垂直に組まれる細木
【天保の飢饉】1833年〜36年頃に起こった全国的な飢饉

- 開館時間：午前9時～午後5時（4月～10月の土曜日は午後6時まで）
- 休館日：12月28日～1月3日
12月・1月・2月の毎週金曜日（祝日の場合開館）
- 入館料：大人500円、65歳以上・小学生300円
※団体（30名以上）400円